

# 議員海外視察 研修レポート

海外の先進事例や国際的な諸問題を考えるため、議員が海外研修を行いました。  
(この視察経費は、全額議員の自己負担です。)



中国北西部

## 砂漠のブドウ栽培と風力発電

日程 平成18年6月29日～7月5日  
参加者 中崎和久／辰柳敬一／大峠五郎／鳩岡明男  
久保明夫／山岸はる美／今野國夫／近藤良太郎



トルファンのブドウ農家の方々と

私たちは、中国の地方都市の実態やエネルギー問題を視察するため、中国北西部の新疆ウイグル自治区を訪問しました。

7月29日出発日、中国大連空港が濃霧のため、仙台空港で7時間も待機することになりました。

仙台空港の閉鎖時刻直前になんとか出発し、大連空港から飛行機を乗り継いで北京に到着したのは明け方の3時でした。ホテルで2時間ほどの睡眠を取った後、早朝5時30分に再び北京空港へ向かいまして、ここでも飛行機が4時間遅れ、葛巻を出発してから約40時間、まさにやっとの思いで新疆ウイグル自治区の中心都市ウルムチへたどり着きました。

ウイグル自治区は、中国国土の6分の1を占めており、ウイグル族、



砂漠地帯トルファンの気温は40℃を超えます

カザフ族、モンゴル族など42の民族からなる多民族地域です。シルクロードの玄関とも呼ばれており、中国とは言え、ロシアやモンゴル、また西アジア諸国の文化や習慣の影響を強く受けている地域です。街にはモスク（イスラム教の寺院）も見られ、店の看板も中国語とアラビア語でかかれており、道ゆく人にはイスラム系の服装も見られました。

首都北京の交通手段はタクシーやバスですが、ウルムチではバイクや、バイクに車のボディをかぶせたも動いていましたが、非常に古い年代のものに見えました。しかし、現地の人々には貴重なものであり、何度も修理して使用するそうです。

トルファンは、歴史的建造物など遺産が多く、近年新たな観光地として注目を集めています。

従って、現地の人々は、子どもの頃から自然に日本語やその他の外国語を覚えるようで、たくさんのお土産を売る人々が、片言の日本語で話しかけてくるのが印象的でした。

豊かな自然を利用して、大規模風力発電を実践するなど、新エネルギーへの取り組みに積極的な中国ですが、一方で砂漠化の進行も深刻です。また、電力だけではなく、水資源や、木を原料とする紙資源の不足などをどのように解決していくかが、中国の重要課題であると感じました。

また、首都北京を中心とした都市部と、私たちが訪問した西の国境付近では、人々の生活に大きな格差がありました。一つの国でありながら、北京オリンピックに首都が盛り上がる一方で、道路や水道などライフラインの整備すら十分ではない地域があります。この両面を視察できたことは、中国を知る上で大きな成果であったと感じます。



天山山脈から風を受けて回る200基の風車

独特の乗り物が利用されてきました。近年、観光地として発展してきたとはいえ、道路など整備はまだまだこれから、という状況でした。

私たちはウルムチからさらに西、中国で一番暑いと言われるトルファンへ向かいました。途中、達坂城という地域で、天山山脈からの風を受けて回る200基以上の風車を視察しました。

この地域では、厳しい暑さから労働者を守るため、夏場は勤務時間を午前7時から10時までと、午後5時から8時までとされています。

到着したトルファンは、気温が43度もありました。しかし、砂漠地帯で湿度が低いので、日本の蒸し暑さに比べると、からつとしていました。トルファンの農産物の生産量はブドウが最も多く、次いで綿花、ハミウリという果物です。日本のスイカやメロンのような果物もたくさん栽培されています。



トルファンの子どもたち。顔立ちは西アジアに近い

砂漠地帯でありながら、このように作物が豊富なのは、オアシスから数十kmにわたり、5千本もひかれたカレーズ（地下水路）によるものです。これにより、乾燥地帯でもみずみずしいブドウ栽培が可能となっていました。

現地の人々は、交通手段にロバを利用していました。観光客を乗せたり、リヤカーをロバに引かせて、羊などの家畜や荷物を運んでいました。まれに、トラクターのような機械